

エッセイコンテスト3等賞

「フランス語とわたし」

松木瑤子

きっかけは一人のフランス人女性だった。

中学以来、10年近くフランス語を学ぶ私にとって、フランス語の学習は、もはや惰性でしかなかった。「フランス語が使えるばよい」という漠然とした理由で就職した会社では、フランス語を目にすることはあっても、実際に使うことは皆無であった。それでも、触れないよりはましだと思って過ごしていた。

ところがある日、ブロンドの若い女性がふらりと会社を訪ねてきた。彼女はフランスで雑誌の編集者をしており、仕事で来日しているという。六本木からの帰り道、偶然にもフランス語の看板が目に入り、こちらを訪れてみたそうだ。

彼女は矢継ぎ早に質問をしてきた。だが、返答しようにも、どうにもフランス語が出てこない。ネイティブ特有のスピードは私をさらに混乱させた。すっかり怖気づいた私は、結局、日本人通訳の女性を介してしか会話をするができなかった。

この悔しさが、私の人生を大きく変えた。「フランス語学習歴10年」という自負はいとも簡単に崩れ落ち、新たな意欲が湧き立った。さらに一皮剥けたフランス語力を獲得し、「フランス人慣れ」をする。私はついに、アテネ・フランセの門を叩いた。

ひとたびアテネに足を踏み入れると、そこには私の想像を遥かに超える世界が広がっていた。これまで、中・高・大学で経験してきたフランス語学習の場とはまったく違う。アテネの生徒たちはみな、自分のスタイルで生き生きとフランス語に向き合っていた。まさに十人十色。そこには間違いなく、一つの「フランス文化」が根づいていた。

この衝撃は、私をさらなるステップへと誘っていった。大学院への進学だ。

この頃、私は学校の外国語教育に疑問を抱いていた。自分の知っている「フランス」が単なる知識でしかなく、フランス人を目にするとたじろぐ我が身に気づいていたからだ。

どうすれば、「知識」の枠を超えて、より深く「フランス」を理解することができるのか。どうすれば、フランス人を前にして委縮せずに対話することができるのか。また、教師はいかにして、「フランス文化」を学習者に伝えていくべきなのか……。これらの解決策を探ることが、修士課程に進んだいまの私の大きな課題となっている。

縁あって、私は昨年度から、フランス語講師としても活動しはじめた。むろん、教師としてはまだまだ力不足で、反省ばかりの日々である。それでも、フランス語を学ぶ者と教える者、両者の視点を持ち合わせていることは、今後、確かな強みとなるだろう。研究で得た知見を学習者に還元していくこともまた、私の大切な使命となるはずだ。

幸い、かつて出会ったフランス人女性の名刺は、大切に保管してある。対仏交流記の中で齋藤先生が示された、「まずは飛び込んでみる」という姿勢を私も見習い、ぜひその女性を訪ねてみようと思心に決めた。そして将来、この思いがけない出会いが、新たな日仏交流の芽吹きとなればと考えている。